

(ケロヨンの指人形) 「修正版」



しんのすけ君はおとうさんの大きな手につかまってホームで電車を待っていました。すると、ホームの後方にあるベンチ方から声が掛かって

「旦那さん、可愛い坊ちゃんだね。坊ちゃんにこれあげてもいいかい？」

とその声は言い、振り向くとひげ面で頭にタオルの鉢巻きをして、泥だらけの汚い服を着たおじさんがベンチに腰掛けたまま、ケロヨンの人形を、人差し指に挿した姿で見せました。

それから、暫く間があった後で、しんのすけ君のかなり上の方でおとうさんの声がして「ありがとうございます。戴いてもいいんですか？」

と聞こえた後、その汚い格好をしたおじさんが、しんのすけ君に目を向けて、ケロヨンの指人形を差し出してきました。

「坊ちゃん、これやるよ。拾ったヤツで汚いけど」

しんのすけ君はそう言われて、思わず後ずさりをしておとうさんの後ろに隠れてしまいました。

本当は、ケロヨンの指人形は大好きで、とても欲しかったのですが、それ以上に何となく怖かったのです、汚い格好をして、昼間なのに目がとろんとしたおじさんが。それに、日頃おかあさんからは、知らないひとに声をかけられても返事をしちやダメよ！ついていってもダメよ！すぐ逃げなさい！と言われてもいましたし。

それで、おとうさんの後ろでもぞもぞしていると、おとうさんがまた上の方から「しんのすけ、人様にものを戴いた時は、なんて言うんだ？ん？ちゃんとありがとうといいなさい」

しんのすけ君は、混乱してしまいました。おかあさんはダメだと言っていた。おとうさんは、ありがとうと言いなさいといっている。そして、自分は、何となくこのおじさんが怖い。でもケロヨンは欲しい。

それやこれや、あれこれ思っていると、またまた上の方からおとうさんの声がして

「済みません。しつげが行き届かなくて。息子に替わってお礼を申し上げます。恥ずかしがつているだけで、とても喜んでおりますよ。ありがとうございます」

その後、程なくして電車がホームに入ってきて、しんのすけ君はお父さんと一緒に電車に乗り込みました。

汚い格好をしたおじさんは、電車には乗ってきませんでした。それを見て、しんのすけ君少しホツとしました。その後一緒に乗ってきて、話しかけられてもなんと返事をしているのか分らなかつたからです。

おとうさんの用事が済んで、家に帰ってきたしんのすけ君は、いつもお母さんから言われているように、まず洗面所で手うがいをしたのですが、その時、泥で汚れたケロヨンの指人形をポケットの中から取りだして、ケロヨンも一緒に洗ってあげました。

そして、その人形を持って自分の勉強机の上に置きました。

しんのすけ君は椅子に座ってケロヨンの指人形を眺めながら、先ほどのことを思い返していました。

お父さんとお母さんの言っていることが違う。それに怖いのと欲しいのと。こんな風に違うのがいっぺんにやってきたときには、どうすればいいんだろう？

しんのすけ君は自分なりに、そこまでは問題を今一度まとめ直してみたのですが、答えは見つかりませんでした。

もし、また同じようなことが起きたら？その時また、今日みたいに、おとうさんの後ろに隠れたまま、お父さんがおじさんとの話を早く終わらないかと、ただ待っているばかりでいるのは、とても嫌な気がしました。それで、なんとか答えを見つけようと頑張ってみたのですが、やはり答えは見つかりませんでした。

しんのすけ君は、やや癩癩持ちの子供でした。ですが、癩癩を起こすと周りに当たるのではなく、何故か自分の手を噛んだり、自分の頭をゴンゴン叩いたり、自分で自分をいじめる変な癖がありました。

それで、答えの見つからない真之介君は、イライラして自分の二の腕にがぶりと噛みつきました。口を離すと、二の腕に歯形がくつきりついていました。うっすらと血もにじんでいます。

それでも、答えが見つからないしんのすけ君は、机に突っ伏したのですが、疲れていたせいもあって、そのまま寝入ってしまいました。